

自由銀運動と J.L. ラフリン

和歌山大学 片桐謙

1 はじめに

1870年代から90年代は国際金本位制の形成期であると同時に、金本位国では物価が持続的に下落する大不況期でもあった。金本位制の維持、または金本位制への移行を模索している国々では、それに躊躇する動きが起こった。当時、実態上も、法制上も、金本位制であったアメリカでは、法定比価16で銀の自由鑄造を要求する自由銀運動が起こった。その主張は単純な貨幣数量説に基づいていた。

J.L. ラフリンは実態としての複本位制の存在自体を否定し、法定比価16での銀の自由鑄造にも、公的な銀の買い上げにも反対し、アメリカの金本位制を支持した。本報告の論点は、1 ラフリンの金本位制の理解、2 ラフリンの貨幣数量説批判の論理、である。

2 ラフリンの貨幣理論

ラフリンによれば、貨幣の機能は、1 価値の共通の基準、本位、2 交換手段、3 延べ払いの本位、からなる。1の本位の機能は2の交換手段の機能に論理的に先行し、しかもその要件は価値の安定性である。彼によれば、「価格」、商品と本位との交換比率、は「評価の過程」を通じて決定される。

ラフリンの関心は商品価格の変動要因にあり、それは金の側と商品側、それぞれの変動によって変動する。彼は金の価値の変動要因として、1 金需要の増減、2 金供給の増減、3 金生産費の変動、をあげ、いずれもマイナーな要因であるとする。特に注目されるのは価格が変動する「評価の過程」である。彼はこれに基づいて、交換手段としての貨幣は貨幣需要によって内生的に供給されると考え、貨幣数量説を批判する。

ラフリンは他方で、商品側の要因として、1 生産費の変動、2 商品需要の増減、をあげ、後者をセイ法則により除外する。彼によれば、結局、生産費の変動が「物価の激しく、急激な変化」をもたらす。また一方で、彼は「一般的な物価上昇が本位の価値を引き下げる手段によってもたらされる」ともいう。ラフリンは「金の価値」を、購買力に表される「金の交換価値」と価格の度量標準とに区別し、前者が相対的な価値比率を決定するための基準、後者が絶対的な価格表示のための基準であり、両者が本位鑄貨に統一されていることを認識している。彼は生産費の変動による物価上昇を実質的な物価上昇と捉える。これに対し、「本位の価値を引き下げる」こととは、価格の度量標準の切下げを意味し、具体的には、悪鑄と不換紙幣の発行からなる。すなわち名目的な物価上昇である。

実質価値が名目価値を下回る貨幣を章標貨幣という。その典型・補助鑄貨の特徴は、1 シーニョレッジの存在、2 自由鑄造ではない、3 制限法貨、4 本位鑄貨での兌換、である。このうち4の兌換は、補助鑄貨の供給量を需要に一致させ、過剰な流通を防ぎ、名目価値を維持するという意味で、ラフリンにとって最も重要である。同じことは他の交換手段に

も当てはまり、「兌換」が貨幣数量説批判の第二の論拠である。

3 自由銀運動への対抗

ラフリンによれば、1850年以前、銀の価値は金のそれよりも安定的であった。グレシャムの法則は金と銀に対照的に作用し、両者は貨幣 - 本位 - として代替関係にあった。金・銀共に莫大なストックが形成されたため、1850年を境に金の価値が安定的になるのとは対照的に、銀の価値は下落し続けた。彼によれば、1850年以降の金生産の増加こそが、1870年以降の銀の減価の原因である。こうして金と銀は貨幣 - 本位 - として非代替的になり、グレシャムの法則は非対称的に作用する。そして金は本位鑄貨として、銀は補助鑄貨として、両者の機能および流通部面は分化する。

更にラフリンによれば、複本位制から金本位制へ移行したから、金と銀の機能および流通部面が分化するのではない。金が本位の位置を偶然、獲得した時、その時を逃さず、銀を補助鑄貨に引き下ろしてしまえば、金本位制は確立する。彼によれば、アメリカでそのタイミングは1853年しかなかった。そして1853年法は銀を補助鑄貨に引きおろす手段を完全に履行した。この意味で1853年法は高く評価されるべきである、とする。

ラフリンは、1873年以降の物価下落の原因は実体的要因の生産費の低下にある、と考える。技術革新、輸送費の低下、通信の発展が生産費の低下をもたらした。彼は1873年以降の物価下落を物価の実質的変動と捉えるのに対して、グリーンボックス期の物価上昇を名目的変動を捉える。この時期、アメリカの本位は「減価した紙幣本位」になった。グリーンボックスは「公債の利子と関税支払い」を除いて、あらゆる公私の債務の法貨だったので、その減価はグレシャムの法則により金ドル貨を駆逐した。そして彼は、政府紙幣の本質を「合衆国の債務」、「政府の金支払い約束」と捉え、「兌換の期待」がグリーンボックスの価値を規定したと考える。政府紙幣は財政的理由から、「将来のいつか、金を支払う」という「究極的な兌換」を約束する不換紙幣として発行される。当時、その背後に「即座の兌換」に応じるのに十分な金準備は無かった。そして彼は、グリーンボックスの減価が解消されていき、1879年1月1日、遂には金との等価を回復する過程を「兌換の期待」の高まりと説明する。この「兌換の期待」は財務省の金準備の蓄積、1億ドルに表されたという。

1878年以降、財務省の銀の買上げによって銀通貨（銀ドル貨、銀証書）が発行された。これら銀通貨には本位たる金ドル貨との兌換は認められていなかったにも係わらず、金ドル貨と平価で流通した。ラフリンは、金ドル貨は、無制限法貨であることを除いて、1シーニョレッジの存在、2自由鑄造されない、3「兌換」、という特徴を備えているから、先の章標貨幣の原理が妥当するという。1878年以降のアメリカ金本位制は跛行本位制という認識である。そして銀ドル貨は「兌換」によって金との平価が維持されたという。

ラフリンにとって、法貨規定のうち、租税支払いは通貨の価値を規定する最も重要な要

件である。正貨原則に基づいて、本来、租税は金ドル貨で支払われるべきである。この租税支払いに銀通貨も通用するなら、支払者は両者を等しく支払いに用いる。そして流通に過剰な銀通貨は財務省へ戻る。他方で、財務省からの支払いは金ドル貨のみによってなされる。これがラフリンのいう「間接的兌換」である。それが働く条件は、1 銀通貨の流通量が納税額を下回ること、2 財務省が十分な金準備 - 1 億ドル - を保有すること、である。当時、財務省の準備は金融と財政の両機能を担っていた。1890 年以降、関税収入の減少、外国資本の引き揚げ、グリーンバックスと 1890 年財務省紙幣の金兌換請求の増加により、財務省の金準備は減少し、代わって、買上げる銀が準備に蓄積されていった。こうして「間接的兌換」の両条件は満たされなくなる。ラフリンは 1893 年恐慌を「本位恐慌」と位置付ける。これは財務省の兌換停止という意味ではなく、銀本位制への移行という意味である。ラフリンは 1890 年以降の状況に直面して、金本位制下で兌換を保証するのは、最終的に金準備と考えた。

4 おわりに

以上のように、ラフリンは金本位制形成の要件を、順に、本位、兌換、準備という三つのレベルで捉えた。このうち彼が強調するのは「兌換」である。ラフリンの貨幣理論は自由銀運動に対する理論武装から生まれたものと考えられる。自由銀運動批判において彼が強調した「兌換」は貨幣数量説批判の根拠としても有効であった。

フロアーからの質問：

法政大学 西村閑也氏：ご報告では、金銀のストック量、年間生産量、金銀の需要量についての統計的研究、市場比価と法定比価の比較といった事実についての研究なしには、研究の発展に限界が生じはしないであろうか。

回答：ご指摘の通り、歴史的事実と照らし合わせ、ラフリンの認識と理論を批判的に検討する必要もあると考えている。